

日本語音声の中間言語研究の基本的課題 —長母音と短母音の習得研究から—

福岡 昌子

1. 日本語音声の習得研究における長母音と短母音の研究の背景

日本語学習者を対象にした第 2 言語習得研究は 1990 年代に入り新たな展開を見せ、音声に関する習得研究もこの 10 年間に急速に研究が進められた。これは、音響分析ソフトの開発による恩恵も大きい、何よりもコミュニケーション能力の重要性に対する認識が、学習者の間にも教師の間にも高まってきたという背景がある。

最近の研究傾向としては、従来の日本語教育において重要視されて来なかったアクセントやイントネーションなど韻律の指導の重要性が指摘されて以来（谷口 1991）、超分節音¹レベルの研究が目立ってきている。一方で、分節音レベルの研究も依然として多い。

その中でも母語の違いを問わず多くの日本語学習者にとって、促音・長音・發音、即ち特殊拍の知覚と生成の両面にわたる習得は、日本語音声において習得が難しい音声項目の一つとされており、その効果的な指導方法も未だ確立されたとは言えない段階にある。日本語の特殊拍の習得は、拍の等時性といった特殊性を持つ音声言語の学習である。特に、「い」「や」「か」「しゅ」等の直音や拗音は単独で 1 拍 1 音節となりえるが、促音・長音・撥音は直音と結合して 2 拍 1 音節となる点が難しい。さらに、直音と特殊音素が複雑に組み合わせると 1 音節 3 拍、4 拍の語も出現し得る。この拍感覚が正しくつかめていない発話は、日本語らしい発話ではなくなる。母語に日本語と異なるリズム構造の言語を持つ日本語学習者にとって、特殊拍の習得の成功如何が日本語音声の上達を決める目安の一つと言っても過言ではない。

長母音と短母音は、さらに、母音の長短を音韻的に弁別できていないと、時には「おばあさん」と「おばさん」の混同に代表されるように、知覚上の問題ばかりでなく発音の不適切さから聞き手に意味

上の誤解も招く。この長母音と短母音の研究は、特殊拍の研究の一環として進められることが多い。最近の研究傾向としては、母語の異なる日本語学習者が単に母音の長さの違いをとらえることが出来ないことから起こる誤用という視点からではなく、高低アクセント、イントネーションなど韻律との関わりから習得上の実態や問題となる要因を探ろうという研究が行われてきており、長母音・短母音の習得研究も新展開を見せ始めている。

2. 小熊（本号収録）「日本語の長音と短音に関する中間言語研究の概観」の紹介

当該論文は、長母音と短母音の習得に関わる国内の主な先行研究を整理し、長母音と短母音の中間言語研究について概観したものであり、研究の流れの方向性を示唆している。国内の現時点における長母音と短母音の習得研究がどの段階にあるかが理解できる。

先行研究について、まず日本語学習者の知覚と生成に分け、それぞれを手法別に縦断研究と横断研究に分類している。さらに横断研究では、習得に影響する要因として学習者の母語、日本語能力レベル、発音への注意度、長音の音声的な環境、イントネーションの影響等について分析された論文を整理し、縦断研究では、学習者の習得過程の記述、指導の効果などについて分析された研究をまとめている。これらの先行研究の比較が表形式で明示されている点も参照しやすい。

また、これらの先行研究の中でも、横断研究において母語のリズムや長音の音声環境などの要因から、習得に見られる言語普遍的な特徴と個別的な特徴を探ろうとする研究に成果が見られること、縦断研究では学習者の習得過程の記述が行われ、その結果を教育の現場へ応用しようとする研究が増えてきていることを指摘している。

ところで、フィンランド語やエストニア語など日本語以外にも母音の長さの対立を有する言語があるが、それらの言語と日本語の長母音・短母音における対立の仕方の違いや日本語の長母音と短母音に関する海外の研究動向の視点等からも考察することによって、日本語の長母音と短母音およびその習得研究の位置付けが一層明確になり、さらに論議を深めることができるであろう²。

3. 日本語の長母音と短母音の音響的有標性から見た長母音・短母音の習得研究における課題

音の長さの知覚特性として、一般的に高い音は低い音よりも長く、強い音は弱い音よりも長く知覚される（ポール・フレス 1971:110）。しかしながら、日本語の長音は、藤崎・杉藤（1977）の特殊拍の音響音声学の実験から、長／短の音韻境界となる母音が先行拍の母音の長さと同様に音の長さが知覚に大きな役割を果たしていることが了解されている。日本語母語話者はこの母音の長／短に関する音韻論的対立を内在的知識として持っており、長母音と短母音を範疇別に知覚している³（Fujisaki et al. 1973）。しかも、皆川（2000）によれば、日本語母語話者は日本語の長母音と短母音の識別では、音の高さや強さの影響を受けないことが指摘されている。このことから、日本語の長母音と短母音は、ほぼ音の長さのみで音韻的に両者を弁別するという知覚上有標性の高い言語音であると言える。

一方、音の長さに関して音韻的対立を持たない日本語学習者では、日本語の長母音と短母音の判断がアクセントのピッチ変化に影響されることが最近の研究で明らかになっている（前川・助川 1995；皆川 1997）。従って、日本語学習者にとって日本語の長母音と短母音を習得するには、いかに母語や日本語のアクセント（高さ）や強さの影響を受けずに日本語の長母音や短母音の長さを識別できるようになるか、また、長母音と短母音を識別する長さの範疇知覚を、いかに日本語母語話者の範疇知覚にまで近づかせていけるかという点も、習得上重要となってくる一つのポイントであるとも考えられる。

生成においては、近畿方言話者は特殊拍にアクセントを置く発話が少なくないが、一般に東京アクセントは促音、発音、長音には置かれず、先行拍にずれる傾向がある。また、アクセントによりアクセ

ントの置かれた拍の長さに影響を与えることはなく、強調により特定の拍の長さが長くなっても先行母音、又は後続拍の促音や発音あるいは長音の長さとの均衡を崩さないという特徴が指摘されている（杉藤 1989）。従って、長母音・短母音の発話ではいかにアクセント核の位置に注意し、長さの均衡を崩さずに制御して発話できるようになるかという点が重要であろう。これには知覚上の習得度との関わりが深いのではないだろうか。

このような点からも、長母音と短母音の習得の実態を調べるにあたって、さらにさまざまな韻律要素との関わりから母語話者別に見ていく必要がある。

4. 分節音レベルにおける日本語音声の中間言語研究の基本的課題とその研究方法

日本語音声の中間言語研究では、これまでその研究対象となる音声を分節音と超分節音とに分けた視点で研究が行われてきた。しかし、本来両者は話し言葉として切り離すことができないものである。分節音レベルの研究においては、長母音・短母音の研究で見てきたように、例えば促音や発音の習得に際し、音の長さや音声環境以外にアクセント・イントネーション・プロミネンス・リズム・テンポ等の韻律要素が伴った知覚や発話では、母語話者別にどのような点が難しいかなど、談話全体や超分節音レベルの視点と合わせて習得の実態を見ていくべきである。これらの研究は、日本語の話し言葉や日本語学習者の日本語音声習得の実態を調べる上でまだ研究が少なく、今後期待される研究課題であろう。

研究方法としてはより正確に総合的視野から習得過程を見ていくために、横断研究と縦断研究を併用した分析方法は必須であろう。さらに、知覚と生成の両面から、できれば同一被験者を対象に分析すれば、言語習得の実態がより確実に把握できる。このような研究は、時間と労力がかかるが、日本語学習者の中間言語の解明を図る近道であると思われる。

そして、習得研究を行った結果は、その成果報告で終始せず、指導への応用を図るような研究までを目標とすべきである。例えば、研究結果からこれまでに提示されている言語習得モデルを検証してみる、また、考えられる効果的な指導方法を考察してみるなどである。習得順序や言語習得の実態等さまざまな点で学習者の言語ストラテジーが解明できた習得研究は、指導への応用を目指すことによって、はじ

めて言語習得理論の構築や日本語音声の教授法の開発に示唆を与えることができる。

その他、日本語学習者の母語の音声・音韻体系の知識、音響音声学の知識、音響分析ソフトや周辺関連機器の知識、統計等の実験心理学的知識を得るとともに、自己の研究の位置付けを把握するためにも国内外の先行研究の動向もしっかり把握して研究を進めていきたい。

最後に、日本語音声の中間言語研究は、まだまだ実証研究が少ないと言われる。超分節レベルの視点もとりにれた分節音レベルの習得研究、そして、今回は長母音と短母音を中心に見てきたために触れられなかったが、超分節音レベルの習得過程を分析した研究は質的・量的にも必要とされている。また、母語、年齢、レベルの違い、音声環境、習得環境、指導の効果等さまざまな点で異なる学習者の実験データに基づいた研究も必要である。これらの実証研究を経ていく過程で、母語転移、言語の普遍性、有標性と習得の難易度等が徐々に明らかにされていくであろうし、そこで、学習者共通の習得のプロセスが見出されれば、中間言語理論構築への貢献にもつながる。今後の実証研究に期待したい。

注

1. 音声には高さ、強さ、音色などの音の心理的属性が認められるが、分節音の特徴 (segmental feature) は音色に関係した音声の特徴である。舌や唇など喉頭よりも上部の発声器官の調整によって定まり、音響学的には主に音の音色 (スペクトル情報) に依拠して伝達される。一方、音の高さ、強さ、長さなど音色以外に関係した特徴を、韻律的特徴 (prosodic feature) ないしは超分節音の特徴 (suprasegmental feature) と呼び、生理学的にはもっぱら喉頭の調整に依存され、音響的には主に音の高さや強さに依拠して伝達される (前川 1998: 6-7)。
2. Warner, N & Arai, T (2001) では、日本語のモーラタイミングについて国内・国外の研究を概観し、長母音・短母音を含むモーラリズムの特徴をまとめ、今後行われるべき研究の指針を述べている。今後日本語教育の立場からモーラについて研究を行うためにも適したレビューである。
3. 範疇知覚 (categorical perception) とは、ある音響波が、例えば [b] か [d] か、[r] か [l] かなど、どのカテゴリーの範囲内にあるかを、はっきりとしたカテゴリーに分けて聞き取る知覚の様式のこと、多くの言語音の知

覚に見出される特徴であり、各言語話者が生得的に持つとされる。

参考文献

- 鮎沢孝子 (1999) 「中間言語研究—日本語学習者の音声」『音声研究』第3巻第3号, 4-12.
- 内田照久 (1998) 「日本語特殊拍の心理的な認知過程からとらえた音節と拍一定常の音声区間の持続時間に関するカテゴリー的知覚」『音声研究』第2巻第3号, 71-86.
- 杉藤美代子 (1989) 「音節か拍か—長音・発音・促音—」『講座日本語と日本語教育2 日本語の音声と音韻(上)』明治書院 154-177.
- 谷口聡人 (1991) 「音声教育の現状と問題点—アンケート調査の結果について—」水谷修・鮎沢孝子編『シンポジウム日本語音声教育—韻律の研究と教育をめぐる』凡人社 20-25.
- 戸田貴子 (1998b) 「日本語学習者による促音・長音・発音の知覚範疇化」『文藝言語研究言語篇』筑波大学文芸・言語学系 65-82.
- 藤崎博也・杉藤美代子 (1977) 「音声の物理的性質」『岩波講座日本語5 音韻』岩波書店 63-106.
- ポール・プレス (1971) 「第2章 時間知覚」『現代心理学 VI —知覚と認知—』白水社 93-142.
- 前川喜久雄 (1998) 「1. 音声学」『岩波講座言語の科学 2 音声』岩波書店 1-52.
- 前川喜久雄・助川泰彦 (1995) 「韓国人日本語学習者による日本語長母音の知覚」『第9回日本音声学会全国大会予稿集』40-45.
- 皆川泰代・桐谷滋 (1996) 「外国人による日本語長母音・短母音識別における母語の韻律特徴の影響」『平成8年度日本音響学会講演論文集』385-386.
- 皆川泰代 (1997) 「長音・短音の識別におけるアクセント型と音節位置の要因—韓国・中国・タイ・英・西語話者の場合—」『平成9年度日本語教育学会春季大会予稿集』123-128.
- 皆川泰代 (2000) 「日本語話者の長・短母音、母音長、純音長の知覚特性—高さ・強さの影響—」『2000年度日本語教育学会春季大会予稿集』209-214.
- 皆川泰代・前川喜久雄・桐谷滋 (2002) 「日本語学習者の長／短母音の同定におけるピッチ型と音節位置の効果」『音声研究』第6巻第2号, 88-97.
- Fujisaki, H., Nakamura, K. & Imoto, T. (1973) Auditory perception of duration of speech and non-speech stimuli, *Annual Bulletin*, 7, University of Tokyo, RILP, 45-64.
- Warner, N. & Arai, T. (2001) Japanese Mora-Timing: A Review, *Phonetica*, 58, 1-25.

(ふくおか まさこ／三重大学)